



まだネウロイに対する有効な手段を、ウィッチのみが握っていた時代。魔力を持たないパイロット達はこう願った。

『ウィッチと共に飛べる翼が欲しい』

1946年。

人類は、ネウロイから複製した新たな魔力の源「レプリコア」を作り、新たな力を手に入れた。

可変支援戦闘機『Variable Support Fighter..VSF』

ウィッチと共に天を翔る、新たな翼である。

まえがき

やあ、ようこそフクロウハウスへ。

この本は新刊だから、まずは読んで落ち着いて欲しい。

此度は当サークルの本をお手に取っていただき、ありがとうございます。

本誌は、2015年8月にC88にて発行された「ストライクウィッチーズValkyrie Lovers Prototype (タイトルなし。通称パティ本)」の前日譚を含む、同時系列の延長線上にある内容となっております。

可能な限り既刊をお持ちでない方も楽しめるようにと構成しておりますが、もしも本誌をお読みになって「既刊Valkyrie Loversも読みたい!」と感じていただければ幸いです。

現在通販等は公に行っておりませんが、ご好評頂けた場合は……お楽しみにお待ちしております!



ちよつとした、おつかい

森の緑も落ち葉が目立ち始め、夏の終わりを感ぜさせる雲が漂う。太陽はやつと空の半分まで上ったところだ。

「まわせー!!!」

若い男の声と共に芝刈り機のような音が一齐に響き、やがてタービーンが力強くうなりを上げ始める。

「相変わらずすごい音だねー！ ねーナオ君!!!!」

「あー?!?! 何言ってるんだかぜんぜんきこえねーよー!!!」

スモークグリーンに塗装されたやや大型の機体が、太いギアに支えられて、軸流式ターボジェットエンジン四基の大合唱を響かせていた。

「ケイスケさーん！ 燃料は増槽に満載していますがー！ もって1200kmが限界です!!!」

通常の飛行機に比べると、幾分か太くガタイの良いシルエットをした機体だ。胴体の両脇には大きな細長い物体が突出しており、そこからさらに二つ纏められたエンジンが飛び出している。機体のあちからこちらで青白く光る結晶が、この機体の異様さを際立たせていた。

「くれぐれもー！ 無理な戦闘は避けるよーにしてくださいーい!!!!」

機首のラインにぽっこりとした透明なコクピットからは、ヘルメットを被った男が、車止めをはずすハンドサインを出していた。

眼下でこちらを見上げる少女たちに視線をやった男は、少し身を乗り出してニカッと笑う。

「イエーテボリで一休みできるし！ 子供でもできるおつかいだろ!!! 大丈夫大丈夫!!!」

まるで人間の作ったネウロイのようなこの機体は、名を「VSF-1ネフィリム」と言う。ウィッチを支援する事を主眼に開発された、可変支援戦闘機の先行量産型第一号機である。

「さてさて、じゃあちよーつと遠出する桂介君を、お姉さん達が送ってあげましょっか！」

「はいっ！ 国境までの警護は任せてください！」

滑走路へ向けてタキシングするV S Fに寄り添うように、ペルシヤとウサギの耳が揺れた。

「こんなかわいいお姉ちゃん二人に送ってもらえるんなら、俺ってば何度でもおつかい行っちゃうよ！」

「あらあら、いい子いい子！ いい子にはご褒美あげちゃう！」

「ごっ、ご褒美い？！」

「おやおやジョゼちゃん、何を想像しているのかな」

「いつもの御夕飯にもう一品付け加えるだけですよっ」

「なっ…ななななっ…あーもー！！！」

無線であれこれと会話をしながら飛び立っていく三機を見上げながら、長身の少女がぼつり。

「あーあ、僕たちのユニットが壊れてなけりゃーねー」

まるで他人事のような発言に、柔らかな金髪にカチューシャを差した少女が犬歯を露わに目つきを尖らせた。

「誰のせいだと思ってるんですか！ 誰の！」

「まあまあ、あんまり怒ると折角の美人が台無しだよ？」

彼女の怒りをひらりとかわした浅黒い肌の少女の隣で、対照的に小柄な黒髪の東洋的な顔立ちの少女がぼつり。

「…おい、ニパの奴どこ行った？」

「あれ？ そう言えばさつきから居ないような…？？」

直後、ズダーンツ！！という轟音と共に、背後の格納庫の扉が吹き飛んだ。

「嗚呼、なんだか嫌な予感がします…」

その後、格納庫の中でバラバラに分解したMe262HG3の残骸

と、勢い余って天井に吊されたニパが発見された。

そもそも、なぜ今朝はこんな賑やかな出撃になったのか。

話を遡ると前日の昼下がりである。

「いやいや、本当に何もしていないのに壊れたんだよ。信じておくれよ」

「そんな素人みたいな言い訳が通用するだけでも？ まったく何度も何度も、今月入ってまだ半分なのにもう8機目ですよ！」

ここは東欧の最前線。ペテルブルグに置かれた、とある基地。

この基地には密かに、いや公然と“お仕置き部屋”と呼ばれる4畳の空間がある。

実際に、本物の畳が敷かれているのだ。ご丁寧に床の間らしきものも存在し、ささやかながら花も生けてある。隅の板張りに至るまで掃除が行き届いており、欧州でありながら大変くつろぎを感じる空間を演出していた。

ティーセレモニー？

ジュウドーカラテ？

いやいやシヨドーでもない。

なんとこの空間はおぞましいことに、ほぼ“懲罰対象者にひたすら正座をさせる”ためだけに存在している。

「まあまあサーシャ君、そう怒らなくてくれたまえよ。これにはふかい事情があるんだよ？」

「……」

そしてこのお仕置き部屋に毎日のごとく座っている三人組を、世は“ブレイクウィッチーズ”と呼ぶ。

「ユニット壊すのに深いも浅いもあるもんですか！ 伯爵も管野も無事に帰ってきたからいいものの、ケイスケさんが居なかったら今頃二階級特進してたんですよ！」

「まあまあ、とりあえず生きて帰ってきたんだし、御の字じゃね？」



怒髪天をつくサーシャの後ろで笑っているのは、いろいろな意味でこの場に似つかわしくない男だ。

グレーのつなぎの上にはリベリオンのフライトジャケットを雑にひっかけたような格好で、腰元にはビール瓶のような大きさのレザーケースを吊るしている。襟章は曹長を表していた。

「全損ですよ全損！ 原型残ってないんですよ！」

「ニパちゃんだって、“偶然、運悪く”ネウロイの射線に出ちゃっただけで、壊したのはネウロイだ。な？」

「う…うん。そう。そうだよ！」

「そーそー、僕たちもあのハリネズミに苦労してさー」

「やっとな撃墜したのに」

口を尖らせて一斉に抗議する様子は、どこかしら巢で餌をねだる雛鳥に似ている。

「ピーピー鳴かない！ とにかくあと1時間は正座ですからね！」

『はい……』

「ケイスケさん、三人がさぼらないように見張ってください。私

は使える部品が無いか探してきますから」

「イエス マム大尉殿。ちゃーんとみてますよー」

戦績さえ良くなければ貴方も正座させてやりたい。

と、ブツブツ文句を言いながら格納庫へ向かう彼女を後目に、桂介は近くの椅子を引き寄せて、逆向きにどかりと座った。

「さて、扶桑には正座椅子つー正座の必須アイテムがあつてな。

直ちゃんは知ってるよな？」

「おう。あれがあるのとないのじゃ段違いだぜ？ ……まさか？」

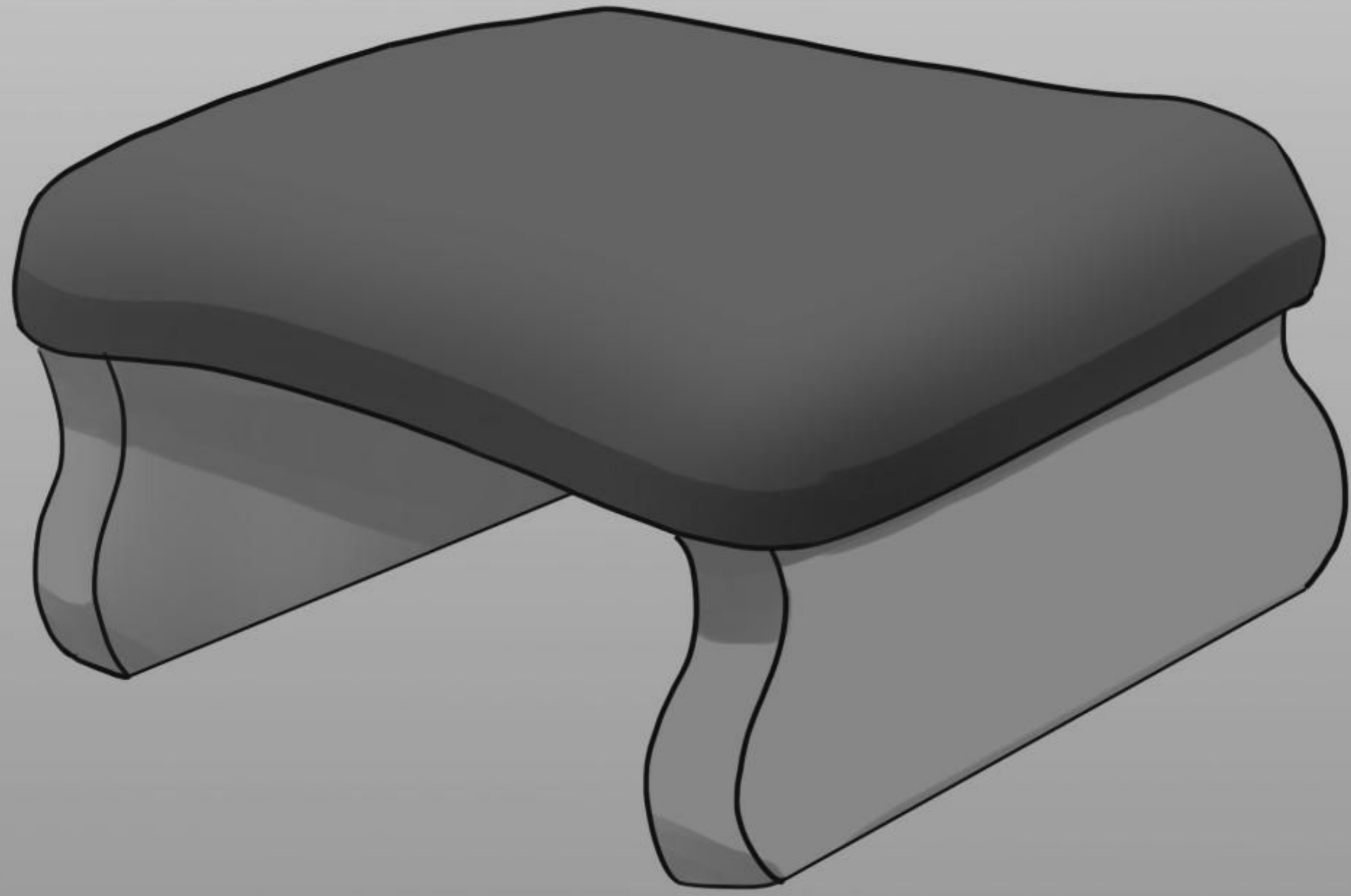
ゴクリ。と、三人の生唾を飲み込む音が聞こえる。

「残念ながら。悪いな」

ガックリ。

「なーんだよケイスケー！ 期待させるなよー！」

「人でなしだな君は！」



「正座椅子使うような育ちじゃねえっての！ モハちゃんあたりが持ってんじゃねえの？」

けらけらと、それでいてあまり嫌味を感じさせずに笑う。

「むしろ、直ちゃんが持ってないのが意外だな」

「持ってきてるけどよ。サーシャに見つかったら大変だろ」

「アーハン。そりゃ賢明だ」

その実、元々詩歌と文学に造詣のある直枝は、そこまで正座と言う行為を辛苦にしていなかった。

しかしながら、何も読む物を与えられず、ただひたすら懲罰としての時間を過ごすことが苦痛であった。

「なあ桂介、なんか読む物とか無いのか？ 手持ち無沙汰が一番辛いぜ」

「読むもんってもなあ。ボンキュッボンなりベリオンの姉ちゃんが盛りだくさんな雑誌とか読みたいか？」

おもむろに彼の手がジャケットの裏地から取り出したのは、きわど

い水着姿のコーカソイド女性が表紙を飾るグラビア雑誌。

「……聞いたオレが馬鹿だったよ」

「何それ！ むしろボクが読みたいな？ な！」

横から目を輝かせて割り込んできたのは、言うまでもない、伯爵だ。

「おいおい、この前古いやつ何冊か譲ったろ？」

「それはそれ、これはこれさ！ 女に古いも新しいもないだろ？ 際どい言い方しやがって。しかたねえな」

「そうと決まれば話は早い、読ませておくれ！」

嬉々として両手を伸ばす彼女は、少なからず魅力的に見える。

きつと渡せば、もっと喜んでくれ、良い笑顔を見せてくれるに違いなかった。

「……いや、それでもしばらくお預けだな。兄弟」

「えー！ ここまで来ていけずにも程があるんじゃないかな！」

当然打って変わって不機嫌全開になる伯爵を、彼は悪戯っぽく笑って制した。

「良い女を楽しむにや、ムードってもんがあるだろ？」

「むう、一理ある……」

「今読んだって、きっと面白くないぜ。そこでだ。兄弟。俺に一つ提案があるんだが……？」

ここで桂介が右手をクイツとひねるのを、見逃す彼女ではなかった。

「……！ 良いねえ、そう言うことなら、俄然楽しみだよ！」

「こいつを肴に一杯！ 決まりだ！」

お互い杯を掲げるジェスチャーで一致し、笑い声が響きわたる。

「……あんまり笑うと、サーシャに見つかるよ……？」

伯爵の横で怪訝な目をしているのは、ニパだ。

「おおっと。自重しないと。何せ懲罰中だし」

「あーいたた、早く終わらないかなー」

何かと体つきをもてはやされる事が多い彼女にとっては、あまり聞かされたくない話だったのかもしれない。

「……二人とも、口を開けば女の子とお酒の話ばかり……」

どこか諦めた風な直枝とは対照的に、目に見えて不機嫌さがにじみ出ている。

「まあ、盛り上がれる共通の話題ってやつだ。な？ 兄弟？」

「まあねえ……。やっぱり一緒に盛り上がれる相手が居るのは違うよね」

「あーはいはい、仲が良いようになによりだねー！」

お互い視線を交わす所がさらに気に入らなかったのか、ニパは膨れてそっぽを向いてしまった。その様子に伯爵はピンときたのか、少し声音を穏やかにして、さも他人事のようにつぶやく。

「そーいやケイスケ君、ことさらニパ君に甘いと思うんだよねー。」

さつきだつて庇ったりしてたし」

「お、おう？ どうしたよ急に」

急に矢面に立たされたような気分の彼を見て、伯爵は悪戯な笑みを浮かべた。

そんな一同の様子をみて、直枝も流れが読めたらしい。

「オレも思った。戦闘中もニパの事ばかり気にかけてたし」

と、一押し加える。

「……そうなの？ ケイスケ」

流石に心が揺れたのか、ニパの視線が刺さる。

「あー、うーん」

美しい女子三人に見つめられて居心地が悪くなったのか、桂介は胸元から銀色の小瓶を取り出して、少し口に含んだ。

ウイスキーの芳醇な香りが広がり、理性的に組み立てられていたあ

らゆる答えを、一瞬のうちに吹き飛ばす。

「そりゃあ、なんだ。あれだ。やっぱおっぱいの大きなカワイコちゃんほっとけないからな！」

「最低だ！！」

胸元を隠すように体を振るニパの隣で、伯爵が“寄せて上げる”仕草をしながらアピールする。

「ム、おっぱいなら僕だつて負けてないつもりだけどな！」

そんなアピールをするまでもない直枝は、折角お膳立てをしてやったのと言わんばかりの表情で、冷ややかな視線を送ってきた。

「はあ……。ま、そう言う奴だよ。お前は……」

しかしながら、天城 桂介と言う男がこういう性格なのは、もはや広く知れてる事である。

とにかく出会った女性は必ず口説き、飲みを誘い、しかも店の樽を

空にしても平気であるような酒豪なのである。

それでも彼が部隊で一定の立場と評価を得られているのは、どれほど相手が酔っていようと無防備だろうと、絶対に悪手を伸ばしたりしないからである。

「……うし！ もう1時間経つたらろ」

もう大概話題も尽きた頃、時計をちらと見やった桂介の一言で三人の表情が和らいだ。

「んっんー！ あーやっと解放されるー」

まるで生まれたての子鹿のようにヨロヨロと立ち上がる伯爵の隣で、よいしょと立ち上がったニパが痺れに打たれてひっくり返るのが見えた。

「あら、もう終わったの？ 今日は早いね」

ニパを引き起こしてやる桂介の背中に、小柄な銀髪の少女が声をかける。

「よう教授。今日も髪さらつさらだな」

「どうせ誉めるならお肌も誉めて欲しいわ？ 少佐とサーシャが難しい顔して呼んでたわよ」

「司令が？ 俺に？ なんだろう」

ついに左遷かときさやく声を背に、今更ナンパな性格を咎められることもあるまいなと思いつつ、執務室の扉を叩く。

「ハロー少佐。ケイスケ アマキ曹長であります」

「うん、入って」

机と書類棚だけが置かれた簡素な執務室だ。机を挟んで栗毛とブロンドの少女が二人で彼を見ている。

相も変わらずラル隊長はすっきりした笑みを浮かべ、一方でサーシヤは眉根を寄せて俯いていた。

「唐突なんだけどアマキ君、ブリタニア行ってくれないか」

「嗚呼、ついに後方送りっすか」

「違いますよ……」

疲れた表情でサーシャがホチキス留めの書類束を見せてきた。

「これ、なんだと思う？」

「三人組が壊したユニットのリストか何か？」

「半分正解。これ、うちに現在不足している機材のリストです」

受け取って、適当にぺらぺらとめくってみる。

なるほど確かにMe262や閃電改の本体やパーツの指定がぎつしり詰まっている。

最後の方には自分の乗る可変支援戦闘機VSF-1の部品リストもあった。そういえば暫くオーバーホールしていない事を思い出す。

「で、これを見てどうすればいいんすかね」

ぶっちゃけ桂介は整備員でもなければ補給員でもない。一介のパイロットである。

「なに簡単な事さ。おつかいに行ってきた欲しいんだ。ブリタニア

まで」

あっけらかんと言い放たれた言葉に、目を丸くする。

「こんな山ほどのパーツを求めて?!ブリタニアまで?!」

「こんな山ほどのパーツを求めて。ブリタニアまで」

「まーじっすかあ…」

流石にこれだけの量は、愛機のペイロードにも積めないなあとと思うところに、サーシャが人差し指を立てて補足してきた。

「輸送機の護衛をお願いしたいんです」

「本来私たちウィッチの支援が目的の貴方に、単独任務をお願いするのは不本意なのですが」

と付け加え、彼女はため息を漏らした。

「はー、その様子だと、あの三人組のユニット、直らなかつたんすね」

「そうですよ。あんまり早いペースで壊すから、交換部品が尽きたんです。機材の補給は7日後だし、あまり余裕はないですね」

「共食いで一機分くらいできないのか？」

「できますけど誰に渡すんですか。また壊されたら洒落にならないです。センデンMk. 2なんか、シモハラさんのユニットが最後の一機ですよ」

なんだか自分も頭を抱えなくなる話だと思い始める桂介である。

カールスラント攻略に向けた最前線である502基地はその特性上、敵の攻撃目標でもあり、輸送機の護衛で主戦力であるウィッチ隊を留守にさせる訳には行かない。かといって護衛せず補給が断たれれば、ただでさえじり貧なのが、もっと絶望的になる。しかもブリタニアは現在もネウロイの定期爆撃に手を焼いており、少しも手を離すことができない状態。

(ああ、そりゃ、イレギュラーで暇そうな俺が選ばれるわけだ)

「美女二人にそうお願いされちゃ、俺も断れないな」

「そうか、君ならそう言うってくれると思っていたよ！」

「たまにはウナギのゼリー寄せでも食ってくるよ。で、出発はいっつ？」

「明朝10時だ。装備は増漕二つで足りるだろう。念のため境界線までジョゼとシモハラを同行させる」

「両手に花たあ、気が利いてるね少佐！ 俄然やる気が出てきた！」

我ながら乗せられやすい性格だと思いつつ、ニッと笑って敬礼する。少佐も「相変わらずだな」と笑い、机から一枚の書類を取り上げた。

「話はもう一つあってね、アマキ君」

じっくりと内容を吟味するように眺めてから、自然な手つきで桂介に差し出してくる。

「以前君が希望していた装備の件だが……。通ったよ」

彼女の手から書類を受け取った桂介の目に“S型改造パッケージ”の文字が入る。

今まで困り顔だったサーシャが、メカマンらしい好奇心に満ちた顔に変わった。

「パーツは完全にモジュール化されていて、設備さえあれば半日で換装できてしまうそうですよ」

「ご機嫌な話だな！で、これは今どこに？」

「つい先日、リベリオンから船便でブリタニアに到着したそうだし」

思わず桂介は生唾を飲み込んだ。老成した少佐の目は、もうお膳立ては済んだと言わんばかりでこちらを見ている。サーシャはなにも言わずに、穏やかな顔で頷いていた。すでに口裏はあわせてあると言ふことだろう。

結論として、彼はこのプレゼントを喜んで受け取る事にした。

「……まったくお二人には敵わないなあ！」

「よろしい！すぐ向こうに準備させておこう」

「ところで、お二人に折り入って相談があるんだけど、良いかな？」

何か腹に一物隠しているような顔を見せる桂介に、二人の少女はそろって首を傾げた。

話が終わり、ご機嫌で部屋を後にした彼を出迎えたのは、うつすら

とした金の髪をショートカットに揃えた少女。ニパだった。どうやら外で待っていたらしい。

彼が502に来てから一番最初に出会ったのが彼女だ。

カウハバから異動してきたばかりで、スオムス語で挨拶をした時の嬉しそうな顔を、彼は未だに覚えている。

「やあニパちゃん。待っていてくれたの？」

「ちがっ…わなくもないけど、なんだったのさ」

本気で彼の処遇を心配していたらしいニパの顔を見て、桂介は大分嬉しくなった。

自分が持ち帰るプレゼントを見たら、彼女はどんな顔をしてくれるだろうか。でも出来るだけこの事は彼女に秘密にしておきたい。

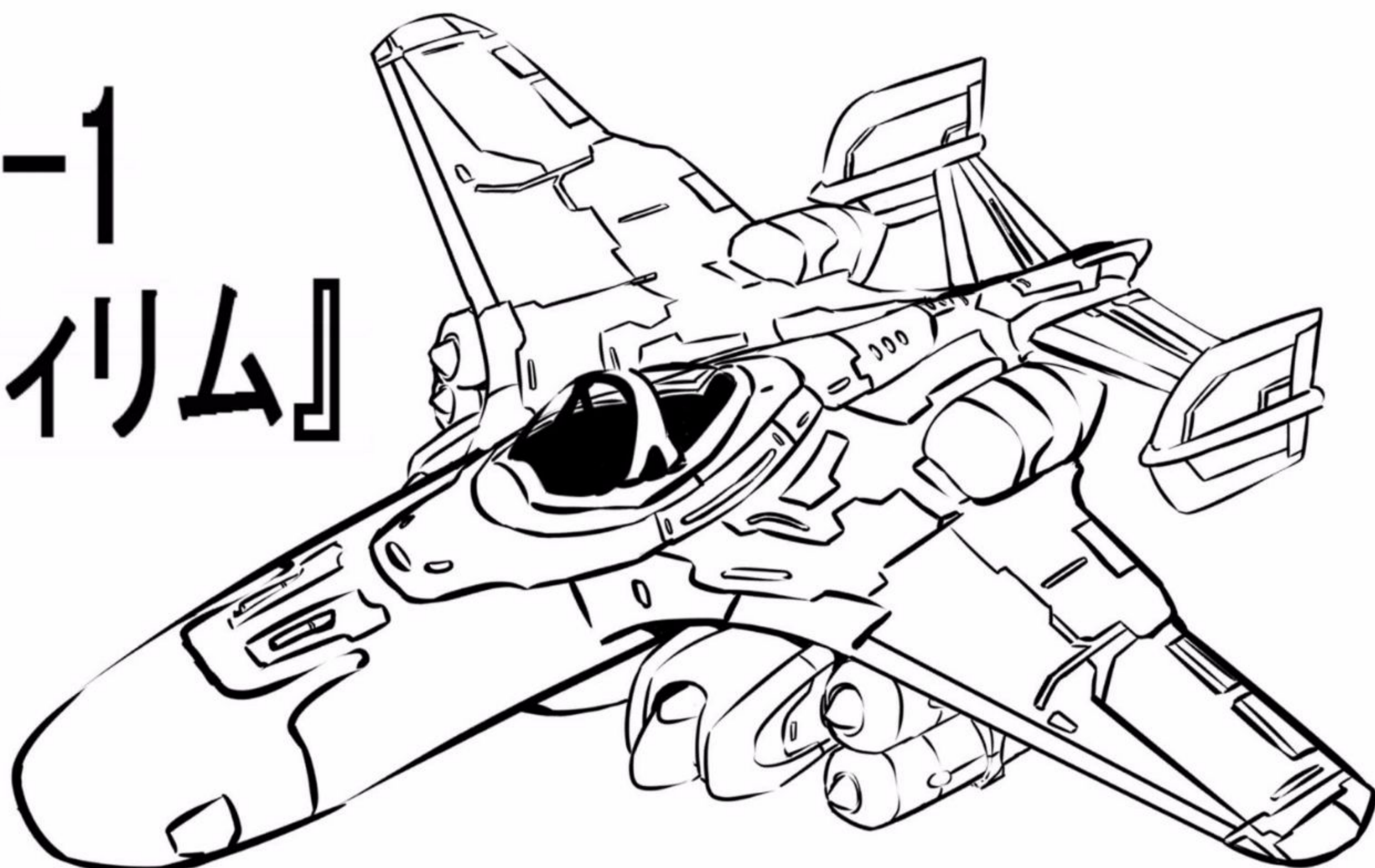
いろいろな考えが巡った後で、彼はただ一言だけ、思いついた言葉を伝えた。

「ちよっとおつかい行ってくる！」

終わり。



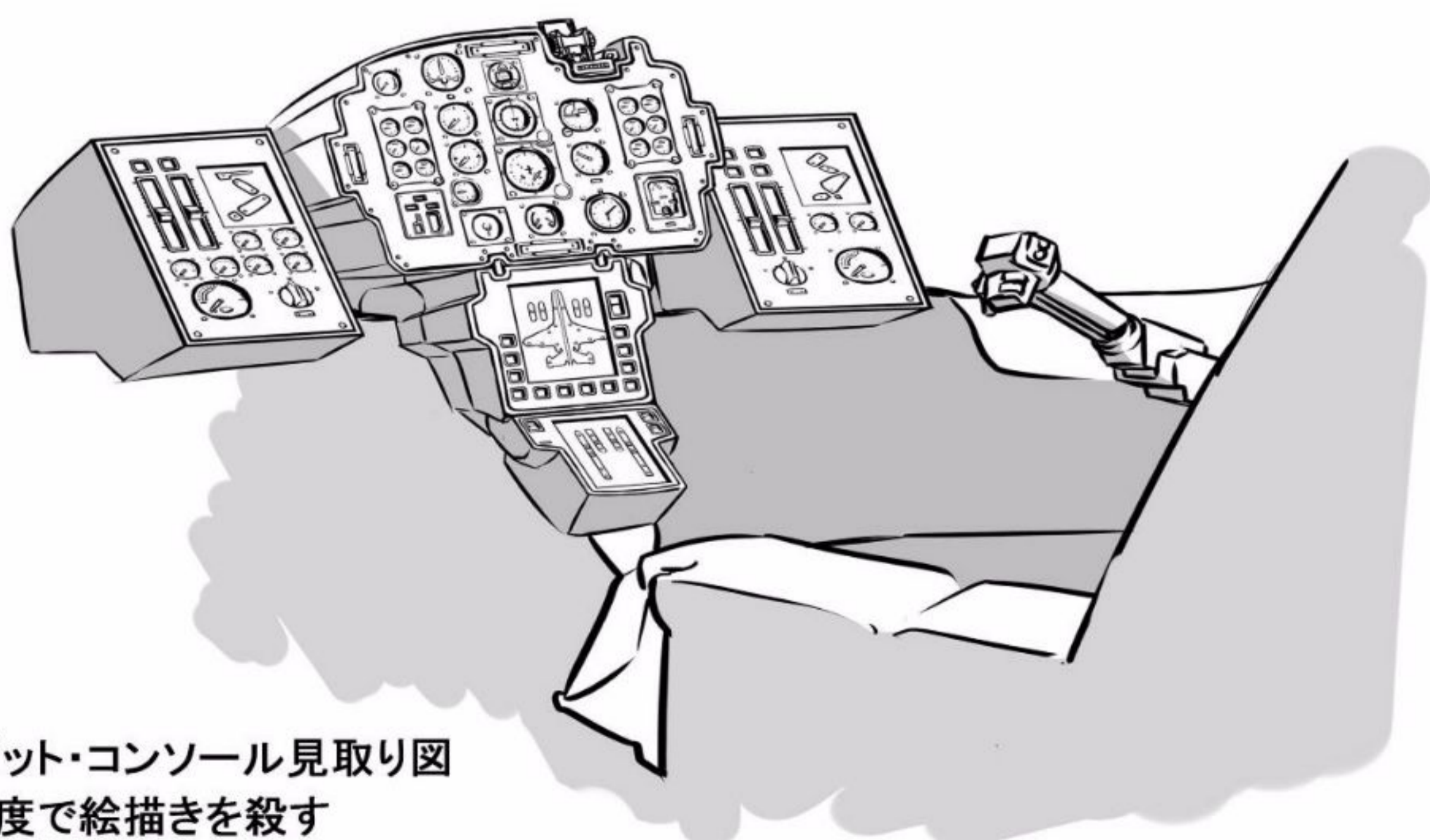
VSF-1 『ネフィリム』



「航空戦力の要であるウィッチを、前線で支援する」思想を元に、リベリオンとカールスラントが共同開発した、可変支援戦闘機の初代量産型。ネウロイコアの人工複製品である「レプリコア」を主な動力源とした魔導兵器の先駆けである。

検 閲 済

体験板ここまで



コックピット・コンソール見取り図
情報密度で絵描きを殺す

